紙漉きを通した表現活動の事例研究

―岐阜県の地域素材を扱った図画工作科の題材開発―

Case Study of Expression Activities through Papermaking

― Development of Materials for the Department of Drawing and Crafts Dealing with Regional Materials in Gifu―

山田唯仁[1]，隼瀬大輔[2]

YAMADA Yuito[1], HAYASE Daisuke[2]

［キーワード Keyword］　小学校，地域素材，岐阜県，紙漉き，題材開発

［所　　属 Institution］　[1]兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科学生（Doctoral program student of the Joint Graduate School in Science of School Education，Hyogo University of Teacher Education），[2]岐阜大学教育学部（Faculty of Education, Gifu University）

［要　　旨］図画工作・美術科では，各地域の魅力的な素材を活用することが重要とされている。岐阜県の地域工芸の一つに美濃和紙がある。岐阜県の代表的な工芸品である美濃地方の紙漉きは学校教育において地域学習として重要である。一方で歴史や文化としてのみでなく，図画工作科・美術科における表現活動においても，紙漉きの造形的な美術表現としての可能性が存在する。本稿では表現活動としての紙漉きという活動を捉え直し，図画工作科におけるその表現の可能性と題材開発に向けた示唆を得るために，小学校での教育実践を行い考察した。

教育実践により紙漉きを通した表現活動の事例を示すことができた。また子どもは紙漉きを通した表現活動の中では，素材への理解や表現の工夫をする姿が見られた。さらに紙漉きの行為の重要さを改めて見直すとともに，紙漉きから造形あそび，絵や立体，工作に表す活動として様々な題材と関連する表現活動に展開できる可能性を示すことができた。

1. はじめに

1. 1. 研究の背景と目的

各地域の魅力的な素材を活用した授業を行うことが重要とされている[1]。岐阜県の地域素材には，木や土，石，紙などの自然をいかしたものが挙げられる。たとえば，飛騨高山地方の木材を利用した一刀彫や木製家具，東濃地方の美濃焼，西濃地方で産出される大理石，中濃地方の関市の刃物や美濃市の和紙がある[2]。

その中でも本実践で取り上げる美濃和紙は長い歴史があり，現代まで美濃地方で和紙の一大産地としての文化が引き継がれている。学校教育においても，紙漉きは注目されてきた。校外学習や社会見学として，紙漉きを体験できる施設に行くこともある。これは社会科や総合学習などにおける学習へつながっており，地域の歴史や文化，環境の理解を深めることにおいて重要である。

一方で「美濃和紙あかりアート展」などの造形作家による和紙を使った光のオブジェなどを見ると紙漉きを通した造形表現の可能性が多く存在する。

そして，紙は絵画の描画用紙として，立体や工作の材料としても低学年でも扱いやすく，色彩も豊富なため図画工作･美術科において欠かせない材料といえる。

そこで本研究では図画工作科における和紙題材の開発に向けて，表現活動としての紙漉きという活動を捉え直すことを目的とする。

1. 2. 先行的な研究

図画工作科の教科書では和紙を使った表現活動としていくつかの題材が挙げられている。絵に表す活動では和紙に墨でにじみやぼかし表現をするという題材，工作や立体に表す活動では透過性が高く優しい光を生み出す和紙を使ったランプシェードを制作する題材がある[3]。これらは和紙の特徴を効果的に利用している。これらはすでに漉かれた和紙の良さを理解し表現へ発展できる題材である。

次に和紙の「紙漉き」という行為に着目した先行研究として，環境教育や伝統工芸への理解を深めることを目的とするものがある。

紙漉きは自然由来の原料から身近な素材である紙をつくりだすという行為の特徴から，環境教育としても注目される[4]。筆者の山田も環境教育として中学校で，牛乳パックの資源の回収から紙漉きによる再生紙の製作という活動を実践した[5]。

また，伊東知之が行った伝統工芸の理解を深めるた

めの教材化の実践がある[6]。伊藤は多くの児童生徒を対象とした授業では専門的な道具や市販の木枠などを使用することは高価であるため準備することが難しいことを指摘し，基本的な紙漉きの制作方法や原理をいかし，ティッシュや牛乳パックを原料にして，身近に手に入るもので道具作りまで行っている。

伝統工芸へ理解につながる岐阜県内の事例として，美濃地方の中学校では紙漉きの仕事に従事している地域の方から指導を受けて，自分たちの卒業証書をつくるという事例がある[7]。また，美濃市外の学校でも美濃地域の施設を利用し体験学習を行うことができる。これらの体験では，本物の和紙の原料である楮を使い，本格的な道具を使用し和紙を漉くという過程を通して，和紙について理解するとともに，郷土の文化への愛着を育むことができる。しかし，伊藤が指摘しているように，同様の学習を各学校で行うためには専門的な用具，技術や知識をもつ人材が必要となるため，各学校で制作環境を再現することは難しい。

また，伝統的な紙漉きの技術は，均一な厚さや大きさなど同じ規格の紙をつくるために培われてきた。そのため，完成するものとしては同じ大きさの和紙となることが求められる。一方，図画工作科の学習は，紙漉きの基本的な技術を理解して和紙をつくることだけが目的ではなく，できたものから自分なりのイメージをもったり広げたりすることが求められる。

以上のように和紙に関する題材や紙漉きの機会，先行研究は多くある。これらの先行研究を踏まえて，図画工作科で紙漉きを通して一人ひとりが自分らしい形や色を追求できるような題材を作ることができるのかについて検討していくこととする。

1. 3. 研究の方法

紙漉きを通した表現活動について，図画工作科の題材開発に向けた示唆を得るため，共著者の隼瀬が原料や用具の準備，基本的な技法について研究を行い，筆者の山田が小学校で教育実践を行った。

本実践は，岐阜市立長良小学校の4年生から6年生の14人を対象にクラブ活動の一環として行った。活動は一単位時間あたり60分間の活動を月１回程度，全７回で行った。期間は2021年の6月から12月である。

本実践では小学校の図工室で子どもが紙漉きを行い，和紙をつくる。その活動の中で一人ひとりが厚さや形，色など造形表現の工夫ができるような余地をつくる。実践を通して子どもたちの活動がどのように展開されていったのかを考察し，図画工作科の題材としての紙漉きを通した表現活動の可能性を検討する。

2. 岐阜県の地域における工芸としての紙漉き

2. 1. 美濃和紙の概要と本実践との関連性

和紙は楮，雁皮，三椏などを原料として用途に合わせて使用される。和紙は洋紙に比べ繊維が長いまま使用されていることや薬品を使用しないで漂白していることにより，高い強靭性と耐久性を持っている。中国から伝来した紙漉きの技術を日本独自に「流し漉き」という技術へと発展させてきた。

美濃の和紙づくりの歴史は古く，1300年以上前に遡るといわれている。良質な原料と長良川や板取川の清流に恵まれていたことが美濃で紙漉きが発展した一つに理由であるとされている。

美濃和紙は「本美濃紙」，「美濃手すき和紙」，「美濃機械すき和紙」と大きく3種類に分けることができる。中でも「本美濃紙」は1969年（昭和44年）に重要無形文化財の工芸技術の保持団体として「本美濃紙保存会」が認定を受けている。「本美濃紙」の指定条件として「純楮（こうぞ）を使用している」，「川晒（かわざらし）による他は薬品漂白をしない」，「ねべし（トロロアオイから抽出した液体）を使う」，「天日乾燥」，「竹簀による伝統的抄紙法」等である。このような伝統的な原料と技法で作られるものが「本美濃紙」とされている。

そして，「和紙：日本の手漉和紙技術 」として，島根県の石州半紙，埼玉県の細川紙とともに国の無形文化遺産にも指定されている。2014年にはユネスコの無形文化遺産に登録されている。この伝統的な技法で作られる強靭で薄い本美濃紙は古文書や絵画など国宝級の文化財の修復にも活用されている。

「美濃手すき和紙」は2021年に開催された東京五輪の表彰状に採用された。「美濃機械すき和紙」にもその技術は発展的に使用され，生活の中で使用する和紙や洋紙の生産が地域で行われている。

また，国の伝統的工芸品に指定されている「岐阜提灯」や岐阜県郷土工芸品に指定されている「岐阜和傘」や「岐阜うちわ」などにもこれらの美濃和紙は使用されている。

このように美濃和紙は，無形文化遺産に登録されている地域の文化としての伝統的な和紙から，産業として機械で生産される和紙まで幅広く存在する。そして，それらの和紙から多くの生活工芸品が作られてきている。このことから，和紙に関する造形表現を扱う学習は，地域の工芸や産業について学ぶ機会となると考え

展開	活動の内容	指導上の留意点
紙を漉く	・各班に別れる。	
	・トレーに水を入れる。	・水をこぼさないようにバケツで入れる。
	・木枠に不織布を入れる。	・内側の木枠は片側ずつ入れる。
	・材料を計り，水をいれる計量カップ（500ml）の中で水と混ぜる。	・茶漉し１杯分の楮と水（約500ml）を入れる。
	・木枠にムラのないように材料を入れる。	・ムラができても指を立てながら叩くようにして整えるよう助言する。
	・指を立てて，材料の厚さが均等になるように整える。	
色をつける	・色紙をちらして全体に色や模様をつける	・色からイメージをもてるよう「どんな感じの和紙になりそうかな？」と問いかけて考えを引き出す。
	・クッキーの金型を置き，色紙をのせることで部分の色や形を表現する。	・色紙をどれくらいの厚さにするときれいな形に仕上がるかを模索するよう助言する。
脱水する	・木枠全体を持ち上げ，水を切る。	・水が点々となるまで待つよう指示する。
	・内枠と不織布を一緒に持ち上げ，絞り台へ移動させる。	・一人で持ち運ぶよりもペアで活動すると安定することを話す。
	・もう一枚の不織布を乗せ，絞り台の上でのし棒を使い押して水気を切る。	・ある程度水が切れたら，トレーに溜まった水を捨てて，再度水を切るよう指示する。

られる。

3. 紙漉きによる表現活動の構想

岐阜の伝統工芸である美濃和紙の中でも「紙を漉く」行為を全体の活動の中心に位置づける。用具の準備や，紙漉きを通して一人ひとりが自分らしい形や色を追求する要素について検討する。

展開は主に「紙を漉く」，「色をつける」，「脱水する」の３つとした。紙を漉く活動の展開は次のとおりである。

「紙を漉く」展開の後に「色をつける」活動を取り入れ，表現の幅をもたせることとした。紙漉きをする途中の脱水する前に，色紙（お花紙をちぎってミキサーにかけたもの）をのせる。活動で使用する楮と同じように，細かくした後に脱水し，必要なだけ使用できるようにした。これにより，子どもは自分のイメージに合った和紙をつくる。

この展開のために必要な用具と材料として次のものがある（図1）。

【材料】

加工済み牛乳パック，楮，色紙，うちわの骨組み，ランプ用の小型ライト

【用具】

水を入れるトレー，紙漉き木枠，ミキサー，布，アイロン，クッキーの金型，不織布1人2枚，割り箸，計量カップ（500ml），絞り台（珪藻土マット），のし棒

図1：紙漉きで使用する用具

4. 紙漉きの教育実践

4. 1. 実践の概要

①活動名「ペーパーアート～和紙でものづくり～」

②活動のねらい

・岐阜の伝統工芸品である美濃和紙と同じ技法の「紙を漉く」活動を追体験する。

・パルプ（牛乳パック）と楮（和紙原料）の違いを体験的に学ぶ。

・紙漉きを通してできた和紙の特徴から感じとったことをもとに，表したい感じに合わせて作りたいものを考えて，用具を工夫して扱いものづくりをする。

③活動の展開

・紙の種類を知る。

・紙漉きをして，お気に入りの紙をつくる。
・紙漉きをしてできた和紙を加工して，好きなものをつくる。
・活動の最後に展示会を行い，作品を発表するとともに，お互いの作品を鑑賞する。

時	展開	活動内容
1	紙を知る	・和紙と洋紙の違いを，実際に紙を触りながら知る。 ・楮を触ったり，紙漉きについての説明を聞いたりして，和紙の作り方を知る。 ・つくりたいものについて考え，制作活動の見通しをもつ。
2	紙漉き①	・教師の示範をみることを通して，紙漉きの方法を理解して，牛乳パックから紙をつくる。 ・紙漉きをして，できた紙に色をつける。
3 4	紙漉き②③	・楮を材料とした紙漉きをして，和紙をつくる。 ・紙漉きの際に，色紙を混ぜたりのせたりして，好きな色や模様の和紙をつくる。
5 6	①②ものづくり	・用具の使い方を工夫して，和紙を切ったり貼ったりしてつくりたいものをつくる。 ・使用感を確かめながら，作品を仕上げる。
7	展示会	・展示会に向けて，作品の紹介文を書いたり，展示の計画を立てたりする。 ・作品を展示して，全校の仲間に見てもらう。 ・活動で工夫したことを振り返る。

④題材の展開

4. 2. 実践の実際

（1）紙を知る

初回の活動では，和紙と洋紙の違いといった紙の種類や特徴について知り，つくりたいものを考えた。この際，子どもに和紙の材料である楮を配った（図2，図3）。子どもは楮から紙ができるということをきくと驚いていた。「これから和紙ができるの？」という素材についてや「紙漉きをするの？」という活動についての驚きの声が挙がっていた。その次は洋紙であるコピー用紙と和紙の2種類を見たり触ったりして，違いを確かめた。これにより洋紙と和紙には，丈夫さや紙の繊維の見え方，手触りに違いがあることに気づいた。

その後，つくりたいものについて考えた。和紙の丈夫さや木の繊維が美しいこと，手触りが良いという特徴を生かして，うちわやランプシェード，iPadケースなどがつくりたいものの例として挙げられていた。

（2）紙を漉く

2回目の活動からは，紙漉きの活動が行われた。はじめは牛乳パックを紙の原料に使った紙漉きを行い，制作方法に慣れたあと原料を楮に変更した。子どもには紙漉きの方法を示範しながら制作方法を伝えた。

子どもが紙の材料を取るときに，団子状にしたものを作っておき，おおよその量を示した。本実践では材料を小さな茶漉し一杯分として，計量カップの中で水に溶かした。

紙漉きをする際は，まず木枠を水桶トレーに入れる。次に，木枠の内側に不織布を敷く。そして計量カップに溶かした紙の材料を，図4のように木枠の内側に入れる。紙の材料を木枠に入れたら，厚さが均一になるように混ぜる。指を立てて叩くように混ぜることで，紙が出来上がった際に穴が開きにくくなる。

紙の厚さがおよそ整ったら，色や模様をつける。今回は５色の細かくしたお花紙を用意した。水を切る前にのせ，お花紙を上から軽く押して混ぜて，紙の繊維が絡むようにする。子どもは色と形の組み合わせを工夫しながら，クッキーの型抜きを使って形をつくったり，ちらしたりする姿があった（図5）。

（3）水をきって乾燥させる

色をつけ終えたら，脱水をした。不織布を木枠に載せたまま持ち上げ，斜めにする。図６のように木枠を斜めにすると水が切れやすくなる。水滴が出なくなるまで水を切り，のし棒や珪藻土マットで脱水した。紙

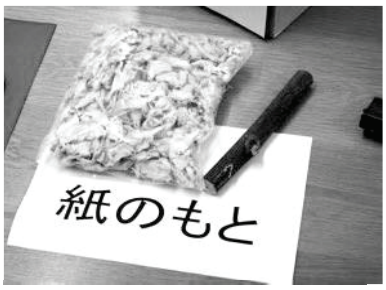

図2：楮の木と加工されたもの

図3：楮を触る子ども

図4：水に混ぜた楮を木枠に入れる

図5：金属型に色紙を入れる様子

図6：水を切る様子

図7：乾燥した和紙に糊をぬって張り合わせる様子

に水気がなくなったら，乾燥棚において乾かした。この際，色紙を厚くのせた子どもの紙は，図柄が潰れがちであった。お花紙を薄くのせる工夫をする姿があった。

紙漉きは，4～6人のグループに分かれて行った。仲間と相談しながら，牛乳パックの紙漉きを2回ほどすることを通して，紙漉きの方法をとらえて一人でもできるようになっていった。なお子どもがつまずきがちな場面は，水を切る活動であった。子どもが紙漉きをする際に，内枠と不織布を一緒に持ち上げ，絞り台へ移動するときに，和紙が崩れてしまいそうになる姿があった。また，水を切ることが十分にできていないこともあった。

（4）立体に使用する

紙漉きをしてできた和紙が乾燥したら，切ったり貼ったりして加工をする。今回はうちわとランプシェードを主につくることとなった。なお接着には，水に溶かした澱粉糊を刷毛で塗った（図7）。

うちわにする場合は，形に合わせて和紙を切る。和紙をうちわの骨にあてて，端に鉛筆をなぞらせて型をとって切り抜いた。このとき，和紙の好きな箇所を切り抜く。たとえば，花の柄が中心に来るようにする姿，模様の気に入っている箇所を選んで使う姿があった。この際，カッターではなくはさみで切り抜く子どもは曲線をきれいに処理できていた。

ランプシェードは，和紙を円柱状に丸めたものと，球体状ものの２種類があった。円柱状のものは，ガムテープの芯に巻きつけて丸め，端をのりで貼り付けていた。球体のものは，膨らませた風船にちぎった和紙を貼り付けて形を整えた。このようなランプシェードづくりは，暗い部屋やダンボールの中でライトを照らしながら，どのように透けるのかを確かめながらつくっていた。

5. 実践結果

5. 1. 作品の紹介文の記述

表現活動の後に，展示会に向けて作品の紹介文を書いた。子どもたちは次のような記述をしていた。紹介文には，大きく分けると「紙漉きの特徴について」と「色や形の工夫について」の2つの内容が見られた。

《紙漉きの工夫についての記述》

・和紙の作り方を一から知ることができました。また，和紙に色をつけたり模様をつけたりしてオリジナルの和紙を作ることができたのでよかったです。

・ランプシェードでは，うちわと違って，和紙の厚さを工夫して，透き通るようにしたり，型を使って模様を作ったりすることができました。

・和紙を作る時に，もとの材料を入れすぎるのではなく，少しずついれて，いい薄さになるようにしました。うちわの骨組みに貼る時は和紙が破れないようにゆっくりのりをぬり，しわができないようにもしました。

・うちわに柄を入れるために紙漉きをするときに内側に模様をつけました。模様をつける時は模様が崩れないように，色の紙を少しにすることを意識しました。和紙が破れないようにすることを意識しました。

《色や形についての記述》

・和紙を作る時は，色をつけてきれいにすることや，月の形にするために，型の使い方を工夫しました。分厚すぎると丸く（円柱状のランプ）にできないので，少し薄めにつくることを意識しました。

・穴があかないように手で直して作りました。模様は夜の空をイメージして作っていて，月の模様は大きい丸いクッキーの型と小さい丸の型を組み合わせて作ったり，水玉もようはスポイトでぬってつくりました。色々な工夫を合わせて作ることができて楽しかったです。

・私はカラフルな色を使ってきれいにみえるよう工夫

しました。丸くして玄関などいろいろなところに置けるようにしました。
・うちわで，和紙の厚さや色の工夫をしながらつくることができたしやり方をしっかり覚えてできた。緑色で自然をイメージして作ることができた。

素材への理解については，「和紙のつくり方がわかった」という技法についての記述があり，また素材の技法を理解した上で，厚さや透けている感じという和紙の特徴に着目しコントロールしている様子が見られた。また，型を工夫して使って思いついた形を作る姿，自然をイメージして緑色にしたという姿が見られ，形や色について工夫したという記述も見られた。

これらの記述からは，子どもが紙漉きを通した表現活動で，素材への理解や表現の工夫をしていたことがわかる。

5. 2. 鑑賞した子どもたちの記述

展示会は，クラブ活動の発表会の一環として行われた。図8～12のように子どもがつくった作品を展示した。展示会には，３年生から６年生までの制作活動に参加していない子どもが来場し，それぞれ鑑賞した感想を記入した。活動に参加していない児童からの意見であるため，感想を考察することにより客観的に見た活動の魅力がわかる。来場した子どもたちの感想を抜粋する。

・色のことなど細かいところを意識して作られていてすごいと思います。どの作品もきれいで和紙でこんなにきれいな模様をつくれるなんてびっくりしました。
・楮の木から紙になることを知りびっくりしました。
・紙は絵をかくだけではなく，光に当ててもきれいだったということがわかりました。みなさんの作品は，いろいろな色に光っていてとてもきれいです。
・普通の紙では表現できない和紙独特の感じがすごいと思った。
・光を使っていてすごくきれいで紙でもこんな事ができるのかとびっくりしました。
・和紙を使って丸や立体的なものを作っているのがすごいし，びっくりしました。ライトに和紙が照らされていてとってもきれいです。
・紙を薄く重ねたりして，光を通るところと，通らないところと分かれていることがすごいと思いました。
・暗い所ですごくきれいに光っていました。貼ってい

図8：展示会の会場の様子

図9：ランプシェードを展示した会場の様子

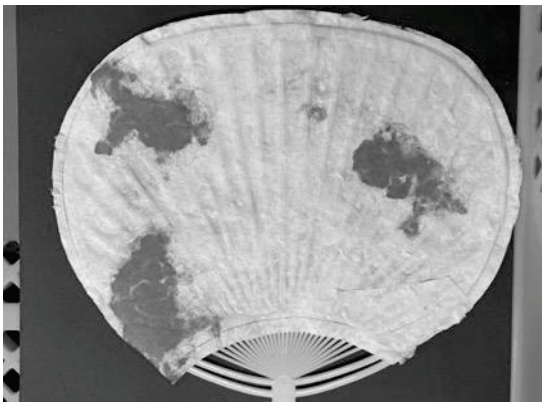

図10：赤い色紙をちらした模様の作品

図11：丸い金型2つを組み合わせて月を表現した作品

る紙と光が合っていてとてもきれいでした。
・花がらやとてもカラフルな作品がたくさんあって，和紙がきれいに透き通っていた。

上記の記述から，展示会に来た子どもたちが和紙の特徴に着目していたことがわかる。紙漉きを通した表現の魅力として，色や和紙の模様，光の透過といった要素に着目していた。また紙を実際につくり，できた紙を使って表現するという点が子どもにとっての驚きであったことがわかる。紙漉きを通した表現活動が，子どもにとって興味のあるものになりうると考える。

5. 3. 活動の振り返りの記述

次に展示会を終えた後，表現活動を行った子どもが活動全体について書いた感想について考察する。

・私はこの活動を通して新しい発見がたくさんありました。たとえば，和紙をつくるもととなっている物は木の皮のような物ということが知れました。和紙を実際につくっていく中でも新しい発見がありました。このことを家でも材料を集めてつくっていきたいです。とても楽しかったです。
・うちわやランプシェードをつくるときは薄さでランプシェードをつくることに決めたり，うちわをつくるときに柄が真ん中になるように気をつけたりすることができました。
・牛乳パックや和紙から，うちわやライトをつくることは楽しかったです。自分の知らない，やったことがないことができて楽しかったしうれしかったです。
・私は，和紙の作り方が追求できました。何を作るかを調べたりして工夫することもできました。いろんな色を使ってきれいになるよう工夫しました。また和紙を作ってみたいです。
・和紙を使って，「うちわ・ランプシェード」を作ることができた。その時に，うちわとランプシェードでは厚さを変えて和紙の材料の量とかを工夫しながら作れた。作る時に紙の材料が全体に広がるようにできました。とても楽しいいずみ（クラブ活動）になりました。

感想からは，子どもが紙漉きという行為について興味を持ち，その特徴について理解をしていることがわかる。「和紙をつくるもととなっている物は木の皮のような物ということが知れました」や「和紙の作り方が追求できました」という記述からは，紙漉きの技法的な理解が深まったことがわかる。また，「和紙のも

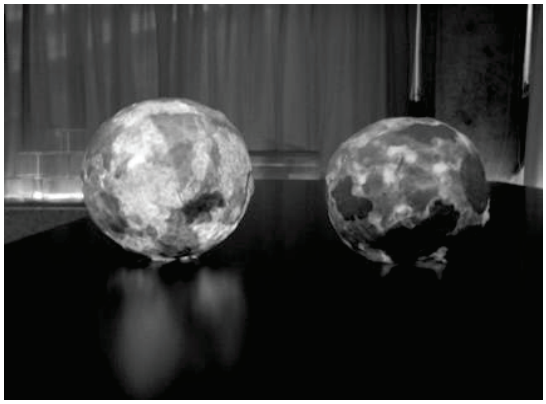

図12：丸い明かりの作品

図13：色をつけた和紙からちぎり絵に発展した作品

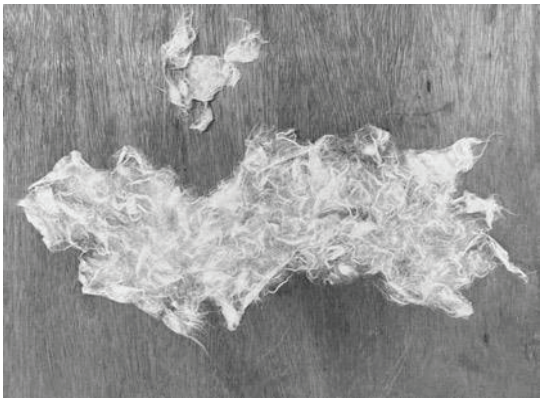

図14：少なめの材料で紙漉きをしたことでできた形と模様

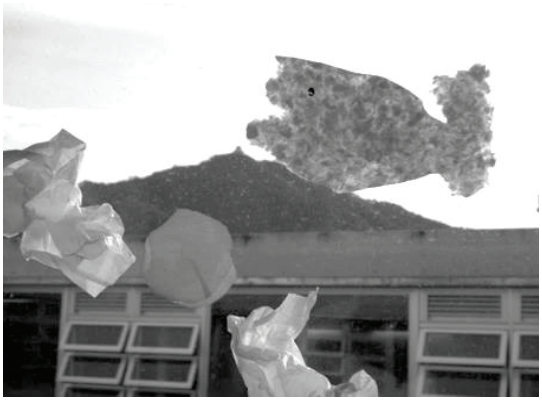

図15：紙漉きからできたものから造形あそびに発展した活動の例

との量とかを工夫しながら作れた」，「うちわやランプシェードをつくるときは，つくった和紙の薄さからランプシェードをつくることに決めたり，うちわをつくるときに柄が真ん中になるように気をつけた」というように，素材をもとに作るものを決めていることがわかる。

6. 図画工作科の題材化に向けての考察

今回は紙漉きから主に立体・工作の分野に活動が展開していった。一方で，図13のように紙漉きでできた紙を使って，ちぎり絵に発展していった子どもの姿もあった。紙漉きという行為から，様々な分野に発展する可能性があると考える。

たとえば図14のように紙漉きによってできる不思議な形や美しい繊維，薄さのムラをもとに発想する活動にも展開できる。手による紙漉きは，材料の量を調整することや木枠を使わないことで，紙の厚さや形を自由に変化させることができる。それにより，紙を漉いた際には偶然性により，意外な表情が表れた和紙になる。この和紙の形や模様を基に発想を広げることができる。たとえば，偶然できた繊維や紙から見えてくる形が，雲だったり顔だったりすることがある。このような手漉きの紙から発想する絵の分野の題材には，3・4上の「ざいりょうからひらめき」がある。この題材は材料を触りながら画用紙に並べたり重ねたりして貼って思いついたことを表していく活動である[8]。なお3・4年下の「これでえがくと」は，画用紙の上に置いた材料の形や色の組み合わせから思いついたことを表す内容である[9]。この題材も紙漉きによってできる素材から発想する展開になりうる。

また図15は紙漉きでできた紙を，造形あそびの授業で活用した子どもの表現である。手で漉いた紙の透ける感じをいかして，窓ガラスに貼って風景を変えている。紙から雲を発想し，「くじらぐも」として窓ガラスに貼っている。岐阜市の街と「くじらぐも」の世界を合わせた景色を生み出した。

なお今回は立体的な作品として身の回りで使用するランプシェードの制作をおこなった。この活動は，教科書における5・6年下「すてきな明かり」といった題材と関連している[10]。また紙での工作題材に「おもしろダンボールボックス」がある[11]。この題材で和紙の手触りをいかした箱をつくるというという展開もある。

7. おわりに

本実践により，紙漉きを通した表現活動の事例を示した。また紙漉きを通した表現活動が子どもの興味を引き出すとともに，地域素材への理解を促すことがわかった。さらに紙漉きから造形あそび，絵や立体，工作に表す活動に展開しうるという可能性を示した。今回の教育実践や子どもの姿から，紙漉きの行為の重要さを改めて見直すとともに，様々な題材と関連をする可能性を見つけることができた。

手漉きによる紙は，光の透過性や偶然できた模様や濃淡をいかして様々な分野の題材に発展する素材であると考える。これまで支持体としての和紙が多く使用されてきているが，透ける素材としてお花紙やセロファンを使った活動と同じ展開の可能性も見いだせた。また絵の分野で画用紙に貼り付ける活動，立体の分野で粘土のように形をつくる活動にも発展すると考える。紙漉きをしてできた紙を使用すると，従来的な和紙への見方とは異なったイメージが広がる可能性がある。

今後の展望として，発達段階をふまえた実践の事例を充実させていく。これを通して紙漉きがどのような題材に関連・発展するのかについても模索していきたい。また岐阜県にある木や土といった様々な郷土の魅力的な素材とふれる題材の開発と実践についても進めていきたい。

注

1. 文部学省，2018，『学習指導要領解説　美術編』，日本文教出版，p. 133
2. 京都市立芸術大学美術教育研究会，日本文教出版編集部，岐阜県中学校美術教育研究会，2016，『美術資料 岐阜県版』，秀学社，pp. 6, 7
3. 日本児童美術研究会，2020，『図画工作教師用指導書　朱書編　5・6年下』，日本文教出版，pp. 60, 61
4. 大久保忠旦，桂木奈巳，市川舞，2010，「環境教育素材としての手漉き紙づくり～ 2. 手漉き紙の製作法と原料生産の変遷」，『宇都宮共和大学　論叢』，11巻，pp. 95-114
5. 山田唯仁，山本政幸，2021，「学校の問題から出発するデザイン教育の実践―ソーシャルデザインからみた美術教育の題材のあり方(2)―」，『美術教育学研究』，第53号，pp. 297-304
6. 伊東知之，2009，「日本伝統工芸（手漉き和紙）の教材化について―手づくりはがき―」，『仁愛女子短期大学研究紀要』(41)，pp. 51-62
7. 前掲書，『美術資料』，p. 6
8. 日本児童美術研究会，2020，『図画工作　3・4年上』，日本文教出版，pp. 46, 47
9. 日本児童美術研究会，2020，『図画工作　3・4年下』，日本文教出版，pp. 40, 41
10. 日本児童美術研究会，2020，『図画工作　5・6年下』，日本文教出版，pp. 26, 27
11. 前掲書，『図画工作　3・4年下』，pp. 28, 29

謝辞

本実践に際して，長良小学校のみなさまにはご理解とご協力をいただきましたことを，感謝申し上げます。

本研究は2021年度・2023年度科学研究費補助金　基盤研究 (C)「地域素材を活用した図画工作科・美術科の教材・題材開発」(課題番号21K02461) の研究成果の一部である。